

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑧

型紙は、和紙を柿液で貼
り合わせた「型地紙（かた
じがみ）」と呼ばれる紙に、
人の手で文様が彫り抜かれ
ている。江戸時代、伊勢（現
在の三重県）で生産・販売
が盛んだったことから「伊
勢型紙」とも呼ばれ、全国

白の多い絵柄の型紙は、染
める際に不安定になるた
め「糸入れ」という技法が
施されている。貼り合わせ
れた型地紙を一度はがし、
周囲をこよりで止めた状
態で文様を彫る。彫り上げ
た後、こよりをはずし、型
紙の間に補強のための糸
を挟み込むという、大変手
間のかかる技法である。1
921（大正10）年ごろ、
絹の網を漆で貼る「紗張（し
ゃはり）」という新しい
技法が発明され、これ以後
は糸入れを用いることが少
なくなった。

へと行商された。型紙を布
の上に置き、文様の部分に
糊（のり）を置くことで、
布を染めあげた後、文様部
分だけが白く残る。

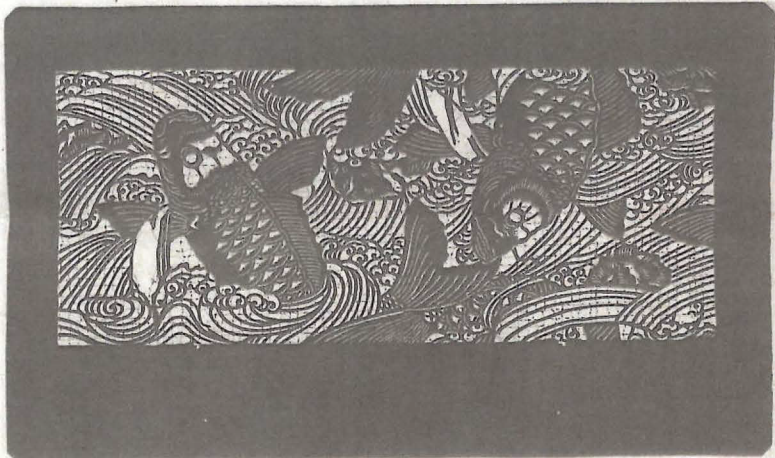
型紙を長い布の上に順に
ずらして置いていき、糊を
置いて染める。そのため、
図柄の上下がつながるよ
うに考えてデザインされ
ている。限られた空間の中
で、考え抜かれたデザイ
ンの鯉は、いきいきと見え
る。その一方で、錐彫（き
りぼり）などの技法で、無
地と見間違えるほどの細
かい文様の型紙もあり、多
種多様な技術の粋が集め
られた型紙は、バラエティ
に富んだ美しい文様と
あいまって目を見張るもの
がある。

本資料は、伊方町の個人
から寄贈された型紙の中の
一枚で、渦巻く波の中を泳

また、本資料のように空
な躍動感あふれる絵柄の型
紙を彫る場合に適してい
る。

鯉の染め型紙

多様な技術の粋 集める



鯉の文様の型紙。縦24.4㍍、横41.1㍍。江戸時代—明治時代。
県歴史文化博物館蔵。民俗展示室2に8月末まで展示中

そして精緻な型紙で染め
られた布もまた、技術と経
験の結晶であり、彫りと染
め、どちらが欠けても型染
めの美は生まれることはな
い。卓越した染めの技術を
持った職人が愛媛にも存在
していたことを物語る資料
といえるだろう。

（専門学芸員・松井寿）

〈随時掲載します〉